

# 平成20年度 郷土資料館特別展

## 「ジョセフ・ヒコ」

播磨町で生まれた「新聞の父」ジョセフ・ヒコが  
1858年にアメリカの市民権を得てから、今年で150周年となります。

### ⑫ 日米を公平に

ジョセフ・ヒコは、1859年に横浜市の本覚寺で帰国の第一歩を踏みしました。



▲本覚寺 日米のために、ここに第一歩を

#### 【ヒコ・クイズ】なぜお寺に入ったのでしょうか

- ① お礼のため
- ② 仏像を見るため
- ③ アメリカ領事館で働くため

今から約160年前、13歳で漂流し、歴史の荒波にもまれたジョセフ・ヒコ。彼が綴った『漂流記』や『自伝』は、全体的に穏やかな表現で書かれています。あの生死の狭間となった漂流のときも「無事平穩」と表現する日があるほど、穏やかに流れをみつめています。

このような穏やかさにひかれてサンダース氏は、アメリカでジョセフ・ヒコを我が子のように育みました。開国にあたり、日米のよき理解者となり、「よりよい未来をつくらせて欲しい」との願いを込めていたと思います。

1859年7月4日(安政6年6月5日)の帰国の第一歩は、横浜市の本覚寺となりました。当時、本覚寺の一隅を借りてアメリカ領事館ができ、ここで領事であるドル氏のもとで、親友のヴァン・リードと共に通訳として、働くことになったからです。

このあとジョセフ・ヒコは、時代の激流の中で職を何度となく変えていきます。そのため、後に人生そのものが漂流していると言われます。しかし、『漂流記』や『自伝』を読むと、時代が激しく変わる中でも定まった視点で、あるべき国の姿などを語っています。文字の力を大切にされた彼らしい人生のまとめ方です。

なお、あるべき国の姿の一例として『漂流記』に当時独立国であったハワイをあげて、「(外国が)小国とあなどろうとしない」国と述べています。その理由を「国政が公平」と記述して、理想の姿に描いています。

横浜開港問題などに通訳として同席したジョセフ・ヒコ。駆け引きの激しい中で、ヒコ自身も日米を公平に見つめて通訳を行うことができた人だと思えます。



● クイズの答 ●

- ③ アメリカ領事館で働くため

【問い合わせ】郷土資料館 ☎079 (435) 5000

絵ものがたり『ジョセフ・ヒコと洋式帆船の男たち』(播磨町ふるさとの先覚者顕彰会) 発売中2,500円

【訂正】2月号⑪「海の男たち」 ヒコ・クイズの中にある「様式帆船」は「洋式帆船」、本文にある「秋吉安民」は「秋元安民」の誤りでした。お詫びして訂正します。

**町の人口** 2月1日現在 (住民基本台帳人口+外国籍人口)

34,252人(±0人) 男…16,823人(+13人) 世帯数…13,382(+2)

女…17,429人(-13人)

